

石川雅望『梅かえ物語』私論

山 本 和 明

はじめに

『梅かえ物語』は、研究史的に観て等閑に付されてきた感がある。作品の短さもあって、過去に翻刻が二回なされているが、『都の手ぶり考証』大倉書店・明治四三年一月／『みなおもしろ』一卷十一号・大正六年二月、それでも挿絵や序文などが省かれたままである。「いわば試作にすぎず、以後は読本を綴っていない」(『読本の世界』世界思想社・昭和六〇年七月)と指摘される。今日、読本「試作」との評価が一般的なのかもしれない。

明治四三年『都の手ぶり考証』が刊行された際、「都の手ぶりは、以上の外にまだ一篇あるが、事柄が面白からぬから、省いて四篇だけに止めた。其の代りに、「梅が枝物語」を以て補ふ事にする」と関根正直は発言する。いわば「其の代り」に過ぎぬ作品との評価が、そのちも持続してきたとみるべきであろう。

しかし、「試作」という評価とともに、以後綴られぬ「読本」のなかで、雅望の作品をどう考えるかという問題をも孕んでいるのではないか。果たして「試作」としての意味しか見いだせないのか。「読本」という評価はどうなのか。「試作」などではなく、それまでの研究姿勢の果てに到達し得た、雅望の集大成としての価値をも読みとれるやもしれぬ。

此書は、無間の鐘といへる浄瑠璃を、伊勢・源氏等の古き詞をもて、物語ぶみのさまにかきなせるもの也。傍に漢字を加へて、其ゆへよしを注し頭書にし、引哥を掲挙て其詞の出るところをしらしむ。故に詞は雅言ながら、意は耳遠くして、理は旁旁きしりやすし。されば、哥の林に遊び狂哥連誹を翫ぶの雅客、はし書やうのものなど書ならふべきためには、よき手本にして、実には大和文初学びの階梯ともいふべき書なり。

「新鐫狂歌目錄 耕書堂」（文化八年以降掲載か―鈴木俊幸『萬重出版書目』参照）に掲げられた『梅かえ物語』の広告文である。例えば、「大和文初学びの階梯ともいふべき書」というその表現をみる限りにおいて、今日謂う「読本」という位置づけと、当時の広告文との間には明らかな隔たりを思うべきであらう。

以前に私は雅望の『天羽衣』『近江県物語』を論じて、「文」への注視ぶりに思いを至したことがある。「大和文初学びの階梯」としての位置づけは、物語として評価する側からすれば物足りなく思うが、しかし「無間の鐘といへる浄瑠璃を、伊勢・源氏等の古き詞をもて、物語ぶみのさまにかきなせる」という作業は、半端な知識では成立し得ない知的な営為そのものに他ならない。「文」創る人としての雅望の姿勢は、一貫していたとも考えられる。いましばらく「読本」云々という枠をはめず、『梅かえ物語』を眺めてみることで、見えてくる視界を捉えてみたい。なお、相愛大学研究論集一九巻に『梅かえ物語』の成立・構成について論じ、併せて序跋・挿絵を含めた全文の翻刻掲載をした。適宜ご参照いただければ幸いです。

大和文初学びとして

広告にあった「無間の鐘といへる浄瑠璃」とは、云うまでもなく元文四年（一七三九）四月興行の浄瑠璃『ひらがな盛衰記』四段目に相応する。この『ひらがな盛衰記』をもとに「伊勢・源氏等の古き詞」を用いて「物語ぶみのさま」に書きなしたならば、その様相を一応検証しておくべきだろう。任意に本文の一部を抜粋してみる。

おしてるなにはのわたりは、よもの国々の舟つどふ所にて、あそびとかなのりするもの、いとおほかなるなかに、神崎のさとなるちとせのなにがしが宿なんわきてにぎはしくひるよるをいはず、ゑひみだれてうちあげあそぶ人たえざりける。こよひとりわきてやごとなき人わたらせ給ふとて、家あるじうるはしうはかまきよそひ、まらうどぬのうちとはきのごはす女ばらは、あかねの布こしにひきゆひてたちはしるさま、いとくすぐるぎたるけはひどもなり。

『梅かえ物語』本文冒頭の一節である。参考までに『ひらがな盛衰記』『神崎揚屋の段』の該当箇所を挙げておく。

ここも名高き難波津に、恋の舟着数々の、多かる中に取り分けて、酒酌みかはす神崎の、里の色宿千年屋は、客に絶間もなかりける。殊に今宵は晴れのお客と、書院座敷のはき掃除、亭主が袴、仲居が揃への紅も、園生に植ゑて隠れなき。

掛詞などを用いた『梅かえ物語』は、それこそ古き「雅言」によって形づくられているようである。一方の『ひらがな盛衰記』が、七五調の音調で構成されるよう言葉が選び採られているのに対し、『梅かえ物語』にはそうした音調を見いだし難い。且つその文章も、語彙レベルでの逐語対応で雅文脈に変えられているわけではなく、意を捉えての変換であることなど、二つの文章を比較して分かる。浄瑠璃の文章と雅言の文章とはそれほど異なるものなのである。幸い、雅望には『源注余滴』『雅言集覧』といった物語研究の成果が備わる。如何なる出自をもった言葉によって「物語ぶみ」が形成されているのか。今、抜粋箇所について、雅望の『雅言集覧』（今、臨川書店『増補雅言集覧』を用いるが、増補箇所は省く）に見いだせるものを掲げてみたい。「用例：『増補雅言集覧』臨川書店版頁数／解説・本文に引用された文献名（任意に略称を用いる）ほか」の順に挙げる。

* おしてる：一四六四／古事記・万葉

* なには：一一六五／ナニカノコト。古今・拾遺・方丈記・栄花・夫木・玉葉・萬代

* わたり…五七七／俗語のアタリなり、辺と同じ。催馬楽・伊勢物・源氏・万葉

* よも…八九一／四方。夫木・山家・続千載・千載

* つどふ…一〇八三／集。万葉・源氏・応神紀・景行紀

* あそび…一九〇一／遊女。源氏

* なのり…一二一八／栄花・宇治拾遺・万葉

* おほかなる（おほかり）…一四〇〇／源氏

* なにかし…一一六九／何の誰。源氏・枕・狭衣

* わきて…六〇四／あるが中のとりわけなり。後撰・続紀

* にぎはしく…三〇九／富める意、俗のタブヤカニテ繁昌ナル意、又ニギヤカナル意、又顔形の上にいへり、いづれもサビシカラヌ意なり。源氏・宇治拾遺

* ひるよる…二三五五／古今

* いはず…一〇九／不言。枕

* うちあげあそぶ…一三〇四／竹取・宇津保

* たえさりける（たえ）…一〇〇四／絶。たゆたゆるは別に次に出す、たやすも別に前に出す。万にわたりていふ、男女の中にいへるも大方は万のことにかけていへば混して出す。源氏・万葉・後拾遺・続後拾遺・新葉・古今

* こよひ…一七六八／源氏・允恭紀

* とりわきて…三九〇／源氏・枕

* やごとなき…一五六七／打捨オカレズ、ノガレラレズといふ心もあるか。源氏・後撰・宇津保

* わたらせ…五八〇／著聞

* 家あるじ：一九／家ぬし也。源氏・後拾

* うるはしう：一三〇六／伊勢・宇津保・源氏・狭衣

* はかまき：一八一／袴着。源氏・狭衣

* よそひ（よそふ）：八六五／神代紀・古事記・万葉・源氏・宇津保

* まらうどゐ：一六二一／今云表坐敷歟。源氏

* はき（はく）：二四〇／掃。拾遺・蜻蛉

* のごはず（のごふ）：一三八一／源氏・中務集・万葉・拾遺

* 女ばら：一四三八／嫗。落窪。老婆。神代紀

* ひきゆひて：二三九四／源氏

* たちはしる：九一九／立走。古事記・狭衣・万葉・源氏

* すゞろぎたる：二五三一／源氏

* けはひ：一六五六／様子。源氏・栄花

用いられた言葉は、それぞれ出自をもった言葉であった。源氏物語・万葉集・古事記等々、様々な用例を雅望は指摘する。「伊勢・源氏等の古き詞をもて」書きなせるとした広告文とは裏腹に、歌の言葉も多く見いだせる。時代も上代から中古・中世へと涉っているし、用例を掲げた雅望もそのことを認識していたであろう。「古事記・日本紀の御典をはじめ、万えふ・古今・六てふ・夫木の代々の歌巻、うつほ・竹とり・くゑんし・栄花とくさぐさの物語ぶみども、大かた雅言のあかしとすべきかぎりつみいで、えりいで」と本居大平による『雅言集覧』序の一節にある。つまり『梅かえ物語』は、「歌巻」の言葉も加わって、時代を跨った「大かた雅言のあかし」とすべき言葉によって形づくられた「物語ぶみ」なのであった。

本文中には、他にも「みやま木」(二二〇三／詞花集)「肩のまよひ」(六八八／頼政集・万葉)「うての使」(一三四六／討手の使。大和物語)「きせなが」(二二〇四／鎧也。平家物語)などといった難解な言葉も用いられている。こうした言葉までを駆使し、元の『ひらがな盛衰記』『神崎揚屋の段』の一部を「雅言」化していったのである。「ひたぶるの鄙俚猥雑なる事のみにて、雅文にはいとかきとりがたきことなるを、かくまで自在に訳ワッされたること、此翁にあらざればあたはざる所にして、其倭文章に卓絶スグシ給へること、たゞ此一書を見てもしるるゝをや」と、『都の手ぶり』を評した『難後言』は言う。その評価はそのままここでも生きてこよう。雅望は、すぐれた訳者ワッだったのである。ことは用語のみの問題に限らない。次に本文の内容面にも立ち入って考えてみたい。

物語ぶみとして

「姉お筆との会話の部分を取り除いたほかは、ほとんど原文を忠実に踏まえるが、すべて原文の卑俗を古雅な文体に転じ、上欄には語句の出典と語意の注を掲げている」と内容面の特徴を指摘したのは、『日本古典文学大辞典』解説であった。しかし、なぜ「姉お筆との会話の部分」が取り除かれたのか。作文指南書として、分量的に多いために省略されたとしても云うのだろうか。

そうではなく、『梅かえ物語』は、単独でも読みうる「物語ぶみ」としての工夫が施されているのではないか。「読本」云々というジャンルの枠とは別に、一つの作品として成立し得るよう、内容面で変更が施されたのだと考えてみればどうだろう。

例えば、省略された姉お筆との会話は、姉妹の父の死を姉お筆が告げる場面から成り、先段の内容を踏まえてのものであった。『梅かえ物語』が『ひらがな盛衰記』の一章段「神崎揚屋の段」を元に行っていることは先述した通り。『梅かえ物語』が全ての章段を雅言に置き換えてはいない以上、元々の演劇の一章段をそのままに和文化的にも文意

が通じなかったり、説明不足となる箇所が生じるのも無理からぬところであろう。単独で完結した読み物とするために、姉との邂逅部分は不要だったのではあるまいか。

省略ばかりではない。単独での読み物とするため、原文にはない部分をもあえて加えたり、説明的な部分をも補足している。これは、もし本書が作文指南書であったなら不要な部分であろう。一例として、遊女梅かえに関して説明した箇所を挙げる。『梅かえ物語』では次のように記される。

梅かえの君といへるは、しよしの別当の北の方に宮づかへせし女房にありけるが、こゝろづからのしのびわざより、かしこをおひやはられて、かうこゝにさすらへて、あそび^{遊女}めにみをかへてけるなり。げに此のひと^樹ものかほりいみじう、おなじつらなるもみなけおされて、ねたきことにおもへるみやま木もおほかりけり。

対する『ひらがな盛衰記』の該当箇所は、「雪や霰や花ちる嵐。可愛男に偽りなくば、本の心で淡路島。千鳥も今は此の里へ身をば売られてやり梅の、名も梅ヶ枝の突出しには名木並ぶ方もなく、千年が許に入り来たり」とする。「千鳥も今は」とあるように、先行する章段を受けて、登場人物「千鳥」が脈絡をもって遊女となっているのである。千鳥とは何者なのか、先行する章段に詳述される事柄である。対する『梅かえ物語』は、原文の意訳ともなっていない。「梅かえの君といへるは」という表現をみても、登場人物の説明をするための書き出しであろう。宮仕えの女房が、「しのびわざ」ゆえに追ひ遣られ、遊女となった。それだけで「神崎揚屋の段」を雅文化するに、状況設定として十分なのである。

このように『梅かえ物語』だけを眺めみても、場面設定が分かるように様々に工夫されている。源太の君との関わりを示す箇所でも次のように示されていた。

「：契りそめしころほひより、^{去年今年}こぞことしとかぞふれば、うきをしのべるとし比のうれたさなど、おぼろげのことには侍らず。聞えまゐらせんこともこゝら侍り。まづなだらかにやすらひ給ひてよ」と、涙をひとめうけて、

怨
ゑんじたるさま、あいぎやうふかし。さるはくだ／＼しきことがなほおほかれどかゝず。

「くくだしきことがなほおほかれどかゝず」という省筆ゆえに、演劇にあった様々な要素は削げ落ち、二人を取り巻く場面状況が生きてくる。

「書ならふべきためには、よき手本」「大和文初学びの階梯」とだけみるには、相応の工夫が凝らされているのではない。巻末にある雅望の跋文に「かのうたひ物のさまを物がたりぶみのやうにかきやりみたるなり」とあるが、文字通り『梅かえ物語』は「物語ぶみ」の第一歩を踏み出そうとしていたのである。

物語ぶみの周縁

ところで、こうした雅望の「物語ぶみ」をめぐることは、当時如何に位置づけることができるのか。昨今の研究成果をふまえつつ、簡潔に眺めておきたい。

まず、寛政四年に刊行された本居宣長の『玉あられ』を例にとろう。『玉あられ』に、次のような記載がある。

今の人の文は、時代のわきまへなくして、中昔のふりなる文に奈良以前の詞もをりをりまじり、又ふるきふりなる文に、むげに近き世の詞もまじりなどして、かの鳴声ぬえに似たりとかいひて、むかし有けるけだものこのこちするぞ多かる。
〔時代のふりのたがひ〕の項

言葉に「時代のわきまへ」の必要なことを述べた一節である。「ふるきふりなる文」を書こうとするに「近き世の詞」を交えることは、時代を混在することであり、「かの鳴声ぬえに似たり」と、その存在のおぼつかなきものとして排除している。

これが、村田春海などへの批判なのは既に指摘される。対する春海に代表される「江戸派」にも次のような発言が残されている。

○およそ文といふものは、唐もやまとも、後の世にありて古のすがたの文をかくには、古の詞のみにてつくらるべきものにあらざ。そは後の世の事を古にうつして書わざなれば、古になき事は、かならず後の詞をあやなしで、古のすがたになぞらへていはでかなはぬことなり。

〔玉あられ論〕より

○近き頃の人の和文をつくるを見るに、みだりに人の耳どほき古言をつづりて人をおどろかさんとする人多し。もと文のつたなきも、たくみななるもさとびたるも、みやびたるも、詞の古きあたらしきによるにはあらず。そは詞の用さま、其趣を得たると、趣を得ざると、其人の心のさとりあきらかなると、くらきに有。事のいひざまいやしからず、心よくとほりて、とゝのほり正しきを、よき文也とはいふになん。

〔村田春海』とはすがたり』巻二「文つくるにこゝろえあり」

「古の詞」のみに拘泥した宣長などの姿勢を批判し、むしろ「事のいひざまいやしからず、心よくとほりて、とゝのほり正しき」こと―他では「古の文の姿といきほひ」と表現しているが―へと目を向けている。春海の遺稿『竺志船物語旁註』で序をもした小山田与清も、次の如く宣長など「ふること学」の輩を排斥するのである。

近世になりて、ふること学などいひのゝしる輩も、なほおもひわかずして、てにをはかなもじづかひのさだにおもひをこらし、あるはことばづかひにこゝろをくだきぬれど、すがたのわいだめをしもさとらざるは、あさましきわざならずや。

例えば、戯作者曲亭馬琴は『南総里見八犬伝』『第九輯下帙中巻第十九簡端贅言』において、この『竺志船物語旁註』を評し「皇国の故事に翻案して古言もて綴れるなり。然しも能文の所為なれば、必初学の為に資助になるよし多からむ」と絶賛する。「和漢の文章、その規矩をまもりては、かゝる有さまは一と下りも書がたかるべし」(『八犬伝八輯下帙の貴評に答まつるふみ』)とする馬琴にとって、宣長のように「古の詞」を正確に用いるよりは、「事のいひざまいやしからず、心よくとほりて、とゝのほり正しき」ことを求めた春海の立場を、より評価しているのであろう。

新しい表現の可能性を模索した馬琴は、「規矩」に固執するだけでは文章は書けないと主張する。そして宣長でさえも、「文」の人として春海を評価した（『復古四大家譜』掲載逸話、『村田春海歌論添削』本居大平識語等）。そうしたエピソードは、『玉あられ』などの主張とは裏腹に、当時における「文」を巡る趨勢を捉えて興味深いものがある。

とはいえ、当時、春海のような「文」のあり方が評価の機軸であったとまでは言い切れないだろう。小林歌城などは、春海の記事よりも雅望の記事に価値を見いだしていた。今、その依拠するところを確認していないが、武島羽衣による論考「小説家としての石川雅望」（『國學院雑誌』二〇一〇・大正三年十月）に引く小林歌城の発言を紹介してみたい。

真淵は、記紀・古語拾遺・祝詞及び宣命の類などより、上古の言をとり集めて、自在をなし、飯盛（山本注―雅望のこと）は、うつば・源氏・落くば及び枕草子やうの辞のみ用ゐて、宣長が学びの親教へに、ものがたりぶみ、皇国などの齒のうくやうなる造り語一つも交へず、をかしく造りたり。（省略）春海なども文はよく書きたれど、をり／＼はいやなる事もまじり候。飯盛は中昔の詞のみつかひていさ／＼かも後世ぶりに引こまれ申さざる故にかくは申す也。

春海の表現には「いやなる事もまじ」るのに対し、雅望などは「中昔の詞のみつかひて」「造り語一つ交へず」「いさ／＼かも後世ぶりに引きこまれ」ていないと指摘している。加えて、雅望『飛驒匠物語』跋文を記した尋幽亭載名の発言にも注目してみよう。

いでやあやしきは、このごろ世にとりはやす物語文よ。さるは、おのれだに知らぬみやび事をさへとりまじへ、は／＼ゆがめて、あながちに口さきらとぎての／＼するから、かの鳴く声鶴に似かよひて、あらぬ獣の化けそこなひたらんやうに、うたてこちなき書きざまをすすめり。

ここでは「世にとりはやす物語文」批判がなされている。注目は「とりまじへ」た文章に対し、「かの鳴く声鶴に似

かよひて」と譬えていることだろう。宣長『玉あられ』と同じく「鶴」を引き合いに出して、「とりまじへ」た文章を排斥していることだろうか。馬琴や春海とは立場を異にした立場も同時期存続していたのである。

「宣長が学びの親教へ」とする歌城の表現からは、雅望は宣長の系譜に連なるのだろうか、歌城はそれ以上に雅望を評価しているよう。歌城の評価は、二点に渉る。一つは「中昔の詞のみ」という時代を弁えた用語の限定性、もう一つは、「箇のうくやうなる造り語一つも交へ」ない姿勢である。

さて、翻って雅望の「文」とりわけ『梅かえ物語』などはどう考えれば良いのだろうか。

これまで確認してきたように、「古事記・日本紀の御典をはじめ、万えふ・古今・六てふ・夫木の代々の歌巻、うつほ・竹とり・くゑんし・栄花とくさぐさの物語ぶみども、大かた雅言のあかしとすべきかぎりつみいで、えりいで」作られた『雅言集覧』に採録された言葉、「歌巻」の言葉も加わって、「大かた雅言のあかし」とすべき言葉によって『梅かえ物語』は形づくられていた。そこには「時代のわきまへ」というほどの厳密な姿勢はなかった。歌城の云う「中昔の詞のみ」というのは、こと『梅かえ物語』には当て嵌まらないが、むしろ歌城の云う「造り語一つも交へ」ない姿勢だけは、一貫していたのではなかったらうか。

武島羽衣は先掲論考で、小林歌城の発言を受けて『梅かえ物語』にも触れている。

梅が枝物語はひらがな盛衰紀の四段目の梅がえが手水鉢を打つところを訳してある。而して用語は之を苛もせず。一句として出典なきものはなしといふに至りては、其の博覧と強記とは実に驚くべきである。

「一句として出典なきものはなし」とした姿勢をどう評価すべきか。当時においても様々な意見が分かれていたように、ことは今日評価する我々の側の立場が問われているのである。

註する書物

雅望は、「雅言」の、特に「一句として出典なきものはなし」という点に拘っていた。のみならず『梅かえ物語』は書物の様式も特色を見せている。その様式に注目してみたい。

『梅かえ物語』版本の一系統には、傍注ならびに頭注、挿絵が存在する。諸本の詳細は稿を改めているが（相愛大学研究論集拙稿参照）、こうした様式にも雅望の意図するところを見いだすことができる。

標註かしらがきをもくはへてんやなど、いひそゞのかせし人ありしかど、いとふるき世ふみの書にもあらず、まのあたり師のふでずさびなるものを、いとことくしげに、標註までやはとてやみぬ。

右は雅望の著作に附されたものでなく、小山田与清の記す『三志船物語旁註』凡例からの抜粋である。「いひそゞのかせし人」とは清水浜臣のこと。本書の刊行を巡って、与清と浜臣の間に齟齬するところのあったことは夙に有名である。今注目したいのは、「いとふるき世の書」でもないから、「標註」を掲げるのを止めた、という一点にある。

『日本古典籍書誌学辞典』を例として示すならば、「頭注」は、「中世までの写本中心の時代から版本中心の時代になり、広く町人階級にまで古典が読まれるようになって、従来は師の講釈によって古典を読解していたのが、一冊の版本の頭注によって古典を読解できるようになった画期的な註釈形式」であり、「寛文・延宝（一六六一〜八一）の頃から特に流行しはじめた」と言う。つまり「頭注」は近世以降に流行した一様式であるにも関わらず、「いとふるき世の書」として扱われていたことになる。

その点、「傍注」はもう少し時代を遡る。「すでに『古今和歌集』の藤原清輔筆本や藤原定家筆本などに、自筆の注が行間を主とした本文の空白部に見られ、室町時代の『伊勢物語』の写本には、講釈によってもたらされた秘注の類が朱筆や墨筆で行間に加えられていることが多」かったとする。この点、少し補足を要するだろう。中世以前の写本

中心の時代における「傍注」は、言わば「書き入れ」であり、はじめから本文に傍書された形式の版本とは異なろう。『梅かえ物語』でも平仮名で書かれた本文に傍記として漢字を宛てている。はじめから漢字表記の本文にルビを付してもよさそうなもの、にも関わらずである。頭注と併用して傍注が意識的に加えられている書物に、『首書源氏物語』や『湖月抄』などの古典註釈書の版本があることは注目して良い。

加えて『梅かえ物語』は一丁表裏に相応して挿絵二面が存在する。版本となった物語に挿絵がついたのは、江戸時代に入って、嵯峨本『伊勢物語』あたりを始めた。そして、通俗向けの出版物が盛行するに従い飛躍的に増加していったことも、周知の文学史的事項に属するだろう。

雅望の『梅かえ物語』は、そのまま江戸時代出版された古典註釈書の版本の一典型の様式を兼ね備えている。先に引用した与清の発言を考慮するならば、恐らくそうした様式こそが、「ふるき世の書」と見なされるものだったのである。今日の研究成果から眺めみると、江戸初期の版本註釈書の類にみる様式は、決して古写本に見いだせるものではない。挿絵が存在すること、冊子本であることなどを考慮すれば、ほとんど無いに等しいのではあるまいか。少なくとも、決してそれが中古の時代様式を代表するものではない。

つまり、雅望は、その生きた時代において「いとふるき世の書」と見なされていた体裁で、「造り語一つも交へ」ず、出処をもった「大かた雅言のあかし」とすべき言葉によって、『ひらがな盛衰記』の一章段から「雅言」による「物語ぶみ」を創りあげていった。しかし結果的には、雅望は中古の様式を全面に模しながら、実は、近世の（雅望の時代の）様式に魅せられていたという皮肉な事態に陥っていたのである。

おわりに

雅望が目指したものは、俗の世界を雅の詞でえがくことであった。

『都の手ぶり』は、たゞ今眼のまへにある所の、ひたぶるの鄙俚猥雑なる事のみにて、雅文にはいとかきとりがたきことなるを、かくまで自在に訳ワケされたること、此翁にあらざればあたはざる所にして、其倭文章に卓絶ズツツ給へること、たゞ此一書を見てもしらるゝをや。

前掲『難後言』にある雅望評である。須く出自をもった言葉によって雅びの世界へと訳すことを評価している。読者も、その描く内容をあらかじめ知っているなかでは、如何なることばで表現されているかに興味をもつことになる。しかし、身近な読者の、つまり俗の俗たる人々がそうした知的作業を解読することに興味を見いだせなかったとしたら、いつのまにかそれは、学者の術学的趣味に陥いる危険性すら孕んでしまう。様々な文体模索は、かえって読者を限定したものにしてしまうだろう。『難後言』は「これを雅文に訳ワケさんことは誠にかたしともかたきわざにて、当時国学先生とよばるゝ人たちの筆にもさらに及べきことにはあらずなむ」と述べているが、そのことと作品自体の価値とは裏腹であろう。『梅かえ物語』は、単独で読みうる工夫をこらされていた。それを読む読者は何を求めて読むのか、またその描かれた文章・体裁をどう理解したのか。微妙な「危うさ」の中に成立した知的営為の産物なのであった。